

まじわり

一、二〇二三年度 第四十七回四国障害者
キリスト伝道会 修養会・総会の報告

日時 二〇二三年十月九日(月)
場所 道後友輪荘(松山市道後町)

(一) 修養会

講演 「試練は平安迄がセット

〔試練にはたった一つの無駄も無い〕

聖書 イザヤ書三十八章一七節

講師 難波 幸矢氏

東中国キリスト者障害を共に学び

共に担う会会長

三〇年近く前に大きい試練に遭いました。夫の病氣と障害と死です。病氣の初めの頃はクソツタレ神様と抗い、何よ神様と食ってかかり、なぜ、なぜと神様を揺さぶってその意味を問いました。そしてその答えは平安のためでした。イザヤ書三十八章一七節の「ああ私の苦しんだ苦しみは平安のためでした」という御言葉の通りでした。私が何者であるかを大わかりした時、許されて生かされてる勿体なさに、神の前にべっちゃんこにひれ伏しました。そして地位も名誉も財産も全くな

いの、草原を歩むようなさわやかさの中で生きることが許されています。

夫の病氣は進行性筋萎縮症という病氣で、いわゆる筋ジスです。これにはいろいろなタイプがあるのですが、壮年期に発病すると二、三年もしくは四、五年で死ぬ場合が多いです。早い人は半年で死にます。幼児期に三、四年で発病しますと二〇歳前後まで生きる場合が多いです。

青年期に発病しますと四―五〇年は生きることが出来ます。病氣のタイプによって死ぬまでの期間はいろいろですが、体がどのようになっていくかという点では、病名が示すように全身の筋肉が萎縮していくのです。瞬きをする筋肉が萎縮すれば目を閉じたままになり、顎の筋肉が萎縮すれば食べたり話したりすることができなくなり、手や足が動かなくなっていくのです。タイプによって上(顔)から萎縮が始まるか、下(足)のほうから萎縮が始まるのかの違いはあっても、とにかく全身の筋肉が萎縮して歩くことは勿論寝返りもできない、自分で歯を磨くこともできなくなってしまう。遂には羽布団一枚が重いのと思うほど呼吸も困難になっていきます。

この病氣になった人は、一度や二度は自殺を試みます。いよいよになってから死のうと思っても、

睡眠薬を飲む嚙下力も首をつる手や足の力もなくなっていますから、死ぬる時に死のうと思うのです。

夫がちょうどそのような時、三浦綾子の『泉への招待』に出会いました。

エッセーですからどこからでも読めます。数頁ずつの読みやすいものです。その一つに「誰のための命」というのがありました。川谷という牧師先生がカナダの教会に行っていた時のことを、教会の礼拝の中で語っている箇所です。「その教会の中に、いつも明るい顔をした夫婦がいた。ある日その家を訪問して、私は驚いた。こんな大変な状況の中で、この夫婦は明るく生きていたのかと思った。その夫婦の愛する子は、重度身障者で、口もきけない状態であった。体だけが大人で、後は子供同然であった。私はその夫婦に言った。「このお子さんを抱えて、明るくしていただけますね。」するとその夫婦は答えた。「先生あの子は私達家族の慰めです。祝福です。あの子がいるために、私達の家族は心が一つになって、愛し合っているのです。」と。続いて教会の人達に川谷牧師は「皆さんの命は誰のためにあるのか。自分のためにあると思っていられませんか。否、私達の命は、他の人のためにあるのです。他のために生きなければ、むなししい人生を送るより仕方がないのです。」と語られたそうです。三浦綾子さんは脳天を打たれたような気がしたと書いています。そして、自分のためにあると思っている限り、どれほど知識を積み、財を蓄え、歓楽にふけても、むなしさだけが増す。と、続けています。

夫は、川谷牧師の言葉にも感動しましたが、本の中の障害を負った青年に出会ったのです。自分もやがては人の世話になるだけの人生を送るようになる。しかし、無駄に生きている人は一人もいない。彼がこうしていく中で両親が変えられた。夫婦が本当の夫婦になっていった。生きていていいんだ。意味のないことを神はなさらない、と思えるようになったのです。私は自分の試練から考えて、このご夫妻がはじめから支え合い励まし合って明るい顔の夫婦であったとは思えません。なぜ私だけがこの子の世話をしなければならぬの？少しはあなたも子の世話をしよと言ったでしょうし、なぜ我が家にこの子が？とも考えたでしょう。長い間の苦悩を通して、しみじみと悟らされ、そして夫婦が明るい顔になっていったのだと思います。

死から生へと夫は変えられました。誰も神の御心なしに生まれてくることはできないし長らえることもできない。生かされている間生きようと決心したのです。

死ぬことをさえ考えていた夫が生きていてくれたのです。これらのことを通して価値観も変えられ、周りをみつめてみると、世の多くの人が疲れ切ったような姿をしている中で、外見は大変そうだけれどもさらさらと、晴れ晴れとした顔立ちで生きていらっしやる障害を負った人やその家族を拝見することができます。

ここに「一障害児の母親の詩」を紹介します。夫もまた私にいい思い出を残してくれました。

一 障害児の母親の詩

私の子どもに生まれてくれてありがとう

私の子どもに生まれてくれてありがとう

あなたが私の子どもでなかったら

石を投げられた者の痛みも知らなかったでしょう

障害の重い人達が天使の心を持つことも知らなかったでしょう

本当の愛も思いやりも

富める人の貧しい心も

貧しい人の豊かな心も

あなたが私の子どもでなかったら

知らずに過ごしたはずでした

私の子どもに生まれてくれてありがとう

とにかく夫は、毎日生きるための努力を必死にしました。元
気な者は何もしなくても生きられますが、難病中の難病で、原
因も分からなければ治療法も分からないという、死にゆく病に
侵された夫は生きるために立ち向かっていきました。どんなに
寒くても、お風呂の入り方としては、水とお湯を一分ずつの温
冷浴や裸体操。そして「食べる楽しみは失ったけれど生きる喜
びを得た。これで命を長らえることができるのなら。」と、あ
の生業食（なまさいしょく）療法を死ぬまで食べ続けたことで
す。ひそかにお葬式を準備する頃になって出会った甲田療法に
よって、それから五年、生かされました。そして、「今日を最
後の日として生きる。」「今が最高の時」「Life is Beautiful」「人

生はいいもんだ」と、皆様に証をして逝きました。

もし、先の所までで話が終わりますと、私は良くできた妻に
なります。生業食療法も一緒にしました。夜の介護も大変でし
たがやりました。勤務先である学校への送り迎えも……と。し
かし、このことを証しなければなりません。

夫が亡くなってから読んだ本の中で、次の図形が示されまし
た。思わず私は、「ああ、ああ、父さんが荒れたのはこの時だっ
たのか。お父さんごめん。」と夫の写真に向かって言いました。
その図形というのは、キューブラ・ロスという精神科医が書い
た「死にゆく過程のチャート」です。死にゆくほどの重い病氣
に罹った時、人は次のような心の段階を辿るといいます。1
衝撃、2否認、3怒り、4取引、5抑鬱、6受容、そして希望と。
それぞれの段階の長さはその人によって違うでしょうし、希望
まで行かない間に死んでしまうこともあるでしょう。

夫は四五歳で死にました。若すぎた、残念だった、お氣の毒
だったと言って下さる方もありました。勿論生きていて欲し
かったです。でももし一〇〇歳まで生きたとしても、この恵み
の試練が無かったら、キリスト教の真理に本當に気が付くこと
も、これほどの平安を頂くことも無かったでしょう。一人とも。
創り主を覚えるという、人生で最も大切なことを知って、その
方に全てを委ねて生きたのですから、決してお氣の毒でも残念
でもなかったと思います。

神様のご計画がすごいと思うのは、夫がこの病氣のことを妻
と年老いた母には言うまいと決心したことです。

これが夫婦のドロドロの始まりです。病気の初期の頃は歩き方がおかしい、転びやすい、手が上がりにくいといった程度でした。が、夫は病院に行かないで、本を読んでヤバイ病気ではないかと感じたのです。何も知らない私としては、夫が「ちょっとおかしいんだけど」と言うので「じゃあ病院に行ったら」と言います。子供なら、母親としてちゃんと病院に連れて行きませんが夫は大人です。心配なら自分で行くでしょう。結局二年近く病院には行かなかったと思います。そして、とうとう行かないではおれなくなつて、夫婦で行きました。医師は病名は言いませんでした。ただ「この病気の権威の方が行っている治療法をやってみましょう。」といつてその医師の名前を言いました。夫には分かりました。私とは言えば、痛みもなく自分で当然歩いて病院に来ているわけですから、やつと病院に行つてくれた。これで治る、と安心しました。この病気の権威者の名前を聞いた夫は全てを察知しました。難病中の難病、死にゆく病、早ければ二、三年で死ぬ、もっと早ければ半年で死ぬ、と。

人は、こんな重たい状況で、妻や母親に知らせないで一人で何事もないうようにして生きられるものでしょうか。それがあの死にゆく過程のチャートです。真綿で首を絞めるようにじわじわと弱つていく。死の恐怖がどんなだったか。叫んで喚いて泣いて、神様なぜですかと激しく揺さぶつて問うほどの苦しみです。静かに黙つてなどおれなかつたのです。それが私へのふて腐れ、いじけ、ひねくれとして現れたのです。

私は夫を愛していました。尊敬していました。夫と結婚した

のも、この人と結婚していれば、神様の道からされることはない。社会を見る目も正しい。歴史を見る目もある。夫に従つてさえいれば私を導いてくれる。そう思つて結婚したのです。その夫が全く尊敬に値しないどころか、醜態を演じているのです。信じられない姿でした。信じられない言葉が戻つてくるのです。ひとたびそうなつてしまうと、結婚して十年あまり、何もいいことなんか無かつた。姑は嫁いびりが生き甲斐のようで、と、楽しいことも沢山あつたのに、悔しい辛いことばかり思い出し数え上げてしまうのです。こんな夫ではなかつたはず。なぜこんな人になつたのか。姑はといえば、嫁のミス息子に言いつける時のあのうれしそうな顔。そんな姑にミスを突かれなためにいらしなながら掃除などの家事をこなす。私はもう疲れ果ててどうにもならない状態になりました。「何なのよ、私の人生」と、神様にも夫にも抗い、姑にはふてくされ「クソツタレ神様、私の人生、何もいいこと無いじゃない、何よ神様！」と、一升瓶を片手に、ストーブでするめをあぶつて夜じゅう悶々とする日が続きました。

指輪をはずし、夫に離婚を宣言しているのに、指輪のないのに気付いた幼い息子に「お母さん指輪は？」と聞かれて、しかたなく指輪をはめ直してふてくされていくような日々でした。そんなある日、コリントの信徒への手紙一の一章四節、七節「愛は忍耐強い、愛は情け深い、愛は自慢せず高ぶらない、礼を失せず自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。……」の御言葉に出会いました。夫婦が、嫁と姑の人間関係が

ドロドロになっていた時、朝からいらだって疲れ果てている時に出会った御言葉です。思わず「ああ、愛がなかった!」と思ったのです。

聖霊の働きです。中学生の時から一体何百回このコリントの信徒への手紙を耳にしてきたことでしょう。頑張ってきたけど愛がなかった。褒められこそすれ批判されないように必死でやっていたけど愛がなかった。私はどんなに一生懸命姑や夫に仕える良い嫁であり妻であるかを認めてもらうための努力ではあっても愛ではなかった。何よりも視点が私から相手を見ることだけに終始していた。

全体を客観的に見てみました。一度「私は正しい」「私はこんなにやってきた」というところから降りようと思いました。

この御言葉に出会い、一歩下がって私を含め家庭全体を客観的に見てみました。一度「私は正しい」というところから降りようと思いました。私が相手に対して我慢してきたつもりだったけれど我慢してもらっていたのではないか。神経すり減らしていたと思っていたけれど神経すり減らしてもらっていたのではないか。つまり私は、ものすごく精神的にも肉体的にもうこれ以上はできませんというくらい、我慢し神経すり減らし、頑張って一人被害者みたいな顔をしていたけれど、私は人を傷つけつつでないと生きていけない人間だったと腹から分かったのです。へたへたと座り込むほどに分かったのです。

夫が病気を隠した。そのために夫婦がドロドロになった。嫁と姑がいがみあった。この事を通して、人間の、私の、何者で

あるかを思い知ったのです。もし彼が早くに、「僕は大変な病気になったようだ」と告白していれば、私達は抱き合って泣いて、しかし「神様のみ旨を一緒に祈ってお聞きしましょう」と言っていたでしょう。そうしたら、到底私の心の奥底の罪には気付かないばかりか、よく仕えて見事に夫を見送った妻が出来上がっていたでしょう。そうしたら、今、こんな平安はいただいていません。何よりも許されているという勿体なさ、生かされている喜び、地位も名誉も財産も何もないのに草原を歩むようなさわやかさ、神の愛が燦々と降り注いでいるという感謝、私の頭の上は青空なのです。全ては、こんなものが許されて生かされているという勿体なさが原点です。

苦しみからは沢山のものを示されます。ヘンリー・ナウエンは『闇への道光への道』の中で次のように言っています。「人生の流れによって、私達は願っていたことを諦めたり、方向転換を余儀なくされたり、また目標の立て直しを迫られたりすることがある。また友を失ったり、対人関係が壊れたり、新しい計画と取り組む事になる時もある。そういう時、私達は、実はより広くより遠くまで先を見通すように促されているのだ。普段心の表面を波立たせているあれやこれやの欲望の下の、希望という深い流れに触れるようにと招かれている。人生で予期しない辛い思いに苦しむ時、私達は「新しい出発が必要だ」と言われているのである。」と。

私も沢山のことを示されました。まず、先ほどから証しますように、自分の罪に気が付くこと。神の愛と恵みと赦しが

燦々と降り注いでいるということ。そのことからくる勿体なさに感謝があふれて生きるように変えられるということ。苦しみを共に呻くものでありたいということ。人を裁くのではなくとりなしをさせて頂くものになりたいということ。謙遜に、また委ねて生きるようにと変えられたこと等々です。

しかし何といっても、最も大事なことは、神の存在を腹から分かったということです。長いクリスチャン生活をしていて、キリスト教は分かっていたつもりでしたが何も分かっていなかった。神の存在、み手、ご計画などと考えてもいませんでした。自分の努力、自分の節制、自分の思い、設計で自分の人生を切り開いていくものだと当然考えていました。一生懸命そのことに進んでいく時、神様は必ずそれを見て助けて下さる。かなえて下さる等と考えていました。日本人の考え方の中には、真面目に生きてさえいれば、というのがあります。それどころかこんなに一生懸命なのだから、良いようにして下さらないはずはないと考えがちですが、それは本末転倒なのではないでしょうか。主権は神にあるのです。全てを越えてトータルにご支配なさるのが神です。そういう神であるということが分かったのです。そしてその神はテサロニケの手紙で「神は私達を怒りに定められたのではなく、私達の主イエス・キリストによる救いに与らせるように定められたのです」と過去形で語っています。因果や罰や業等というのではなく、何とかしてお前を救いたいのだ、平安に生きてもらいたいのだ、こんなにお前を大事に思っているのだと、見つめて下さっている方なのです。

アウグスティヌスの小論文に「秩序」というのがあるそうです。その中にこう書いていると浜田美也子牧師がキ障共の講演会で教えて下さいました。「私達は、いわば神の作品である刺繍の裏側を見ている」と。刺繍は色系で模様を刺していきます。裏は絡まっていたりコブができていたりします。なぜこの色系がここに出て終わって結ばれて切られているか分からない。しかし表を見る時、神の作品ができています。どの刺し渡しもこれはいらぬというものはないのです。

私は、苦しみは平安までがセットだと思っています。でなければイエスの十字架の意味がありません。神様の見事なご計画の中で必ず平安を頂けるように既になっていると信じています。夫が病気を隠した。泣くに時があり、悲しむに時があり、憎むに時があつて泣き、憎み悲しみました。沢山の試練という点を結んでいくとその線は神へと向かつていくのです。そして平安へといざなわれるのです。

私は信徒ですから詳しいことは分かりませんが、ルカさんはイエス様が亡くなって五〇年くらいして「良い知らせです」と「福音書」を書きました。今二〇〇〇年経っています。

勿論これまでに全世界で沢山の説教集や証が出されました。それほどにイエス・キリストを救い主と証言する人々が多いわけです。私達はその書物や証言者に励まされ支えられて、苦しみを乗り越えさせて頂きました。私達も、自分にして下さった神の恵みと赦しと愛を書いてみませんか。「聖書を書きましよう」なんて、なんと傲慢な！とお思いですか。でも「私」を書

くではありません。「神」を語るのに傲慢という言葉が当てはまるでしょうか。むしろ「まだ、私を知らないというのか」と、神は首を長くして神を大胆に伝えることを待っていらっしやるはずですよ。と言つてもここまで言ったらやっぱり傲慢と思われるでしょうか。「難波幸矢の手紙」「幸矢の子どもたちへの第一の手紙」「母校東雲学園への手紙」などいかがでしょう。

マルコによる福音書三章三節やルカによる福音書八章八節で、手の萎えた人にイエスが「真ん中に立ちなさい」「立つて真ん中に出なさい」と言っている箇所があります。ここで律法学者やパリサイ派の人々が、安息日に人を癒すかどうかを見つめていることに対するイエスの怒りとして書かれているもので、障害を負った者を教会の真ん中、中心に置くかどうかの私のテーマとは違いますが、敢えてこの箇所を引用しました。

障害を負っている人や、人生の途中で障害を負ってしまった人は、普通の人より生きる意味や自分の身におこった障害の意味を分かりたいと、宗教を求める人は多いと思います。

そしていくつかの宗派を渡り歩きます。キリスト教は特に敷居が高い。差別もある。仲間とか地域で一緒に暮らしているご近所さんとしてではなく、お客様扱いをしている間に願わくばそっと去っていつてくれないか等と考えている。京都のある教会では、統合失調症の人が教会に行ったら、「あなたのような方が行く教会は西古倉めぐみ教会がいいでしょう」と言われたという。普通の身なりの人、もしくはいい格好の人だったら喜

んで「良くいらっしやいました」と諸手をあげて歓迎するであろうのによです。

教会員の障害者に対する考え方は、一般社会で生きているわけですから、一般社会の考え方と根っこは同じです。むしろ、信仰によって何かが固まったというか、何かに固執するものを得て、一般社会より差別的でさえあるように思います。本当に今、教会全体で信仰の見直しが迫られているように思います。

日本教徒キリスト派くらいのものじゃないでしょうか。ほんのイヤリングかブローチといった飾り物くらいではないでしょうか。生まれ育った日本という社会での染み込んだ宗教観である因果応報や御利益信仰から出ていないのではないかと。人生うまくいっていることが信仰のおかげなどと勘違いしていませんか。極楽が天国という言葉に変わったくらいのとらえ方でしかないのではないかと。キリスト教が日本に入ってきた時、仏教や儒教の土台でしか聞けなかった限界が、今、問われているのではないのでしょうか。イエスの十字架の意味を牧師も信徒も本当に深く染み込ませたか。根本の所であるイエスの十字架がちゃんと伝えられたのか。それを聞き取ったのか。そして子供の額に印するほどに伝えたか。

「一生懸命まじめに生きれば、きっと神様は助けて下さる」といった、お願いすれば聞いて下さるといような、後ろに従わせているような神ではなく、「主権は神にある」「すべてをトータルにご支配なさる神」そういう神として伝えてきたか。ちよっとオシャレな飾りの神くらいではなかったか。私達一人

一人の信仰が問われているのではないのでしょうか。

障害者が隅に置かれ、あるいはおり辛く、それとなく排除される状況や、職業差別、否、うちの教会には弁護士何人、教授何人、医師何人、教師何人と地位や名誉を誇らしげに語る牧師の言葉に、障害者は身を細めるしかないのではないか。教会の高齢化が叫ばれて久しいが、若者がいないわけじゃない。若者が宗教を求めないわけじゃない。あれだけオウムに若者が集まったではないですか。

今教会が本当に祈る群れになっているのでしょうか。神について語り、共に子供のことにについて相談し、病氣や老いや仕事のことと悩みを打ち明け合い、励まし合い慰め合い祈りあっているのでしょうか。何事もないふりを、すべて上手くいっているように見せ、病氣を知られないように装っていないのでしょうか。うまくいっていることが信仰のおかげと勘違いしている人々や、地位や名誉のある人々に教会全体が牛耳られていると、弱い人々や苦しんでいる人々は何も言えなくなってしまう。そういう価値観の中で真っ先に弾き出されるのが、否、入れないのが障害者ではないか。障害イコール罪。障害イコール欠けた者、分らない者、出来ない者、障害者にしてあげることはあっても、一緒に信仰について語り合おうなどとは思っていない。彼らから試練を通して得たことをお聞きしようなどとは思っていない。自分の方が上だから。障害者が講師の時は聞く。しかし普通の障害者には聞くほどのものは何もないという態度が見え見えです。

先日、盲人の友から電話がありました。積極的な人で信仰については彼女なりの証を持っている人です。彼女は以前通っていた教会で、どうしても教会生活を一緒に送れないと苦しみつつ転会した経緯があります。彼女は、現在通っている教会から帰ってきて、涙が出てしようがないのです。教会で、信仰の友のつもりで対等に話し合っているのに、疎外され続けて言葉がすれ違う状態に疲れ果てたというのです。先の教会を去った時には自分を責めた。自分が間違っていたのではないかと。高慢になっていなかったかと。でももし今行っている教会を去ることがあっても、今度は自分を責めない。「幸矢さん、障害者の行く教会がないのよ！」と言いました。それでもなんとか留まって、教会で証をさせていただいたそうです。障害者の立場から障害を理解して頂くための証でした。障害者に声をかける時は、「A子さん、難波です」と相手の名前と自分の名前を言ってくださいなど、自分に話しかけてくれたのかどうか分からないから。手引きは半歩前を等、わかりやすく説明しながら証をしました。ところが「私がしてあげるんだから大丈夫」といった態度や、次の週のみんなの態度の冷え冷えとしていたこと！「厳しいです、幸矢さん」と言ってきました。

ありがたい、お世話になります、すみませんと、よい子障害者（私が創った言葉です）のうちはいいいのですが、障害者がいったん声を出し始めると、生意気な障害者、わがままな障害者にされてしまうのです。障害者が主体的に生き、主体的に発言することは、いわゆる健常者にとっては我慢ならないように

す。また後で聞いた話ですが、彼女がその教会に行きだして二年経ってやっと、彼女の週報ボックスができたということです。

本当に今、キリスト教の原点、十字架の意味、イエスに倣うということが教会で問い直されなければならないと思います。教会の中のおそらく隅の方にか、神を神としてさらさらと生きている方がいるはず。その人が教会から居なくなる前に、その方々と一緒に、遣わされた者として、この神の愛と恵みと赦しのすごさを、伝えないではおれないこの喜びを、大胆に伝えようではありませんか。おっかなびつくりそれでも勇気を振り絞ってキリストを求めて来た人を、教会のまん中にお連れしようではありませんか。おそらくやっと教会の隅まで入ってきた手の萎えた人に、イエスが「ここに来なさい」と招いたのは会堂のまん中だったのでから。

先日の、キ障共の講演会で講師の鈴木恭子牧師は「ある人が問題を起こし、他の人々を置いて関わらなければならなくなつた時がありました。九九匹の羊は一匹の羊がいなくなると落ち着かないのです。一人のために他の教会員の方々を放っておくことになっても不満は出ませんでした。むしろそれを見て、自分が窮地に陥った時は本気で取り組んでくれるという安心感があると信徒が言いました」と言われました。

最も、今困難を覚えている人に牧師が心を注ぎ込むことは、他の信徒が落胆したり妬むものではありません。むしろ一人の人に何か問題があった時、牧師はあれほどまでに心を注ぎ込んで下さるのだと確認し、信徒も一緒になって事に当たるものなの

だと確信しました。むしろ、あちらの事が忙しいからあなたの問題までは手を伸ばせませんという姿勢のほうが重大問題です。

今困難を覚えている人、苦しみにある人をおおって困って教会全体で支え合うようにと今一度勧められているのではないのでしょうか。
(講師 難波 幸矢氏)



(二) 総会

頌 栄 五四〇

祈 禱 明石 公子 (四障伝会長)

書記選出 野口 幸生

議 事

① 二〇二二年度活動報告

(二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三〇日) の件

・役員会 会長 明石 公子 副会長・書記 野口 幸生

会計 松木 稔夫 監事 岡本 康夫

顧問 丸木 道弘

・第四六回修養会・総会 二〇二二年十月十七日

道後友輪荘 三〇名出席

・役員会

二〇二二年十二月二八日 書面

四名出席

二〇二三年六月十五日 書面

四名出席

二〇二三年七月四日

道後友輪荘 四名出席

・機関誌『まじわり』発行

一一三号 二〇二二年十一月二八日

一一四号 二〇二三年八月二八日

・キ障協修養会総会(全国キリスト教障害者団体協議会)

二〇二二年七月三十四日 道後友輪荘

六団体 二二名出席(内 四障伝一〇名、奉仕者含)

講 演 「息子の『障がい』をも賜物として」

成田 信義 牧師(土佐)

開会説教

小島 誠志 牧師(久万)

教会こども食堂の証し

森分 望 牧師(三津)

閉会説教

岡本 康夫 牧師(南国)

○書記から説明され、質問なく満場一致で承認された。

② 二〇二二年度決算及び監査報告の件

○松木会計から資料1及び資料2に基づいて説明された後、岡本監事から監査報告がなされた。

○質問なく満場一致で承認された。

③ 二〇二三年度活動計画及び予算案承認の件

○書記から活動は基本的に前年同様と説明された。

○予算案が会計から資料1に従って説明された。議場から、

会費八千円とは何か質問があり、会計と書記から規約説明

と併せて説明された。満場一致で承認された。

④ 次年度修養会・総会に関する件

二〇二四年十月十四―十五日(月祝・火)

○右の日程で道後友輪荘を会場に、次年度はコロナ前の一泊

プログラムに戻る予定であることが書記から説明された。

質問なく満場一致で承認された。

○健康上の理由から、次の会計は新しい方が選ばれることを

お祈りくださいと役員会からお願いがあった。

閉会祈禱 広瀬 満和(川之江教会牧師)



資料 1

2022年度会計決算報告および2023年度予算案

2023年9月30日

収入の部	2022.10.1から 2023.9.30まで (予算)	2022.10.1から 2023.9.30まで (決算)	差異	2023.10.1から 2024.9.30まで (予算)	備考
前年度繰越	1,213,611	1,213,611	0	1,213,155	
会費	20,000	8,000	-12,000	10,000	
献金	200,000	223,752	23,752	200,000	
修養会・総会参加費	20,000	22,000	2,000	20,000	
雑収入		6	6		
合計	1,453,611	1,467,369	13,758	1,443,155	
支出の部					
講師謝礼	30,000	30,000	0	30,000	
講師旅費	10,000	10,000	0	10,000	
友輪荘会場費	20,000	3,300	-16,700	5,000	
参加費交通費補助	40,000	26,580	-13,420	40,000	
修養会参加補助					
キ障協参加費	20,000	55,550	35,550	20,000	
キ障協負担金	15,000	15,000	0	15,000	
地区会補助					
まじわり誌発行	100,000	94,600	-5,400	100,000	
役員会費	20,000	0	-20,000	0	
事務通信費	25,000	19,184	-5,816	25,000	
雑費	5,000	0	-5,000	5,000	
予備費	1,168,611	0	-1,168,611	1,193,155	
次年度繰越		1,213,155	1,213,155		
合計	1,453,611	1,467,369	13,758	1,443,155	

上記四国障害者キリスト伝道会会計報告に関し、金銭出納帳及び入金、出金に関する領収書等を監査した結果、適正に処理されていることが認められました。

ここにご報告いたします。

2023年10月2日

監事 岡本 康夫

資料2

《会費》

戎野くみ子（日和佐）、眞部昇三（今治）、松木稔夫、川島なつみ（南国）、野口幸生（高知東）、矢野敬太（愛南）、柳謙二（高知）、田村幸（須崎）

（以上八名）

《献金》

徳丸文子、白石美恵子、正岡リツコ、井川静華、杉岡栄見子、香川孝子、大澤美穂子、中谷幸子、原島夙子、玉井寿枝、森本里美、小山由里、眞部八重子、三宅やす代、木谷誠、木谷美保、宇野良子、檜垣勝世、小松紀子、横田澄江、菊川芳子、上柿京子、浅海美千子、越智千歳、嶋野弘美、高砂優子、眞部昇三、吉川庸介、津田匡美、津田美鈴、徳丸延子、三好三枝子、宮本津由子、黒川ヒロ子、渡辺夏子、矢野悦子、匿名二名様（今治）、大澤淑子（丹原）、不動光子（さや）、明石公子（三津）、李振一、齋藤彩、吉本敬子、戎野くみ子、木場弘子、増田純代、大西梯子、高原芳枝（日和佐）、田村幸（須崎）、大森美加子（西条）

川之江教会、三島真光教会、丸亀教会、丹原教会、松山教会、日土教会、高知中央教会、日和佐教会、土佐教会、宇和島中町教会、宍喰教会、阿波池田教会、宇和島南伝道所

須崎教会婦人会、松山山越教会ぶどうの会、屋島教会婦人会、松山

城東教会婦人会、多度津教会婦人会

高知分区教会婦人会連合、四国教区教会婦人会連合、徳島分区教会婦人会連合、東予分区教会婦人会連合

編集後記

復活のキリストの御名を賛美いたします。

昨年より二度目の一日短縮プログラムの修養会・総会を開催することが許され感謝いたします。四二名の出席が与えられ、共に福音の交わりに与りました。講演内容は以前「キ障協No.43」にも掲載されましたが、実際に目の当たりにする講師のお話は聖霊様に満たされ静かに熱く、キリストを愛し、教会を愛する、神様の愛が染み渡る恵み豊かなメッセージでした。

また祈りの課題でした会計役員交代も、修養会後に引き継いで下さる方が与えられ、主の山に備えありと御名を褒めたたえ感謝しております。四障伝の働きをお祈りくださりお支えくださっているすべての方々に心から感謝を申し上げます。

皆様の上に、主の恵みと平安が豊かにありますように心からお祈りいたします。

栄光在主